

荒船風穴は群馬県の下仁田の谷に作られた天然の冷蔵庫の遺跡で、蚕卵を保管するために使われた。長野県で 1870 年代には、偶発的に自然の寒風がふく洞窟や谷に蚕の卵を保管することで、1 年で複数回の繭の飼育が可能になることが発見された。荒船風穴のような寒い谷は、自然の中でも稀である。夏の気温が日中、摂氏 30 度以上に上昇しても、谷を流れる空気は凍る寸前の冷たさである。これは谷の岩にある隙間によるものだ。岩の間に落ちる雪や氷は春の雪解けを免れ、山の空気が谷を流れるときは解けていない雪の影響を受けて冷たい。荒船風穴は地元の養蚕農家である二ワヤセイトウ（時期不明）によって作られた。養子の二ワヤセンジュ（時期不明）は高山社で養蚕を学び、故郷の寒い溪谷は他の都道府県のような自然の冷蔵施設に変わることができると気づいた。彼は倉庫の建設を先導した父親に、そのことを伝えた。1904 年に建設が始まり、1939 年まで施設は利用された。岩を通して流れる冷たい空気を捕らえるために、貯蔵棟は谷間に建てられた。木造の壁や屋根も石造りの基礎の上に建てられたが、今日では残っていない。荒船風穴が存在している間、これは日本で建設された最大の天然冷蔵施設で、100 万枚以上の蚕卵紙を保存することができた。荒船風穴により、養蚕農家は、年間 3 回の孵化サイクルを実施し、繭生産量、したがって絹生産量を 3 倍にすることができた。